



会田安明の紹介



関連企画「和算にチャレンジ」

## 《地域との協働》

### 市民との協働活動 ポローニャとの交流活動

佐藤 琴（附属博物館学芸研究員）

#### 1. 活動の経緯

2011年、山形大学は特別プロジェクト「井上ひさしの東北」の一環として「ポローニャの会」をスタートした。この勉強会の目的は、山形出身の劇作家である故井上ひさしの『ポローニャ紀行』を題材に、山形、そして東北の今後の街作りについて語り合い、行政などに対する市民からの提言をまとめていくことであった。その活動から発展して、実際にポローニャに赴き、現地の人々と交流する市民団体「チェントロ・ポルティコ研究会」が2014年に発足した。本団体はこれまで、ポローニャにおいては中学校の授業で俳句を初めとする日本文化を紹介したり、日本文化に関する講演会を開催してきた。また、ユネスコ創造都市ネットワークへの映画部門での加盟を目指す山形市を支援するために、音楽分野で加盟を果たしたポローニャの推進役であった、マウロ・フェリコーリ前ポローニャ市経済振興局長を招へいし、山形市長との対談のコーディネイトし、山形市民に対してユネスコ創造都市の効果に関して普及啓蒙する活動などを実施してきた。その甲斐もあって、2017年11月に山形市は創造都市ネットワークへの加盟を果たした。

山形大学附属博物館が、市民団体が主催するポローニャとの交流活動に参加することになった契機は二つある。まず、本交流活動にはポローニャ東洋美術研究所が全面的に協力している。この研究所は、1987年、東洋美術とその文化の普及を目的とし、ポローニャ大学の教授やローマ国立東洋美術館長らが中心となって設立された。東洋文化関係の蔵書は約1万冊にのぼり、イタリアで最も充実した東洋関係の図書館としても利用されている。この研究所にはイタリアにおける有数の浮世絵コレクターのコレクションが寄託されており、所長であるアレッサンドロ・グイディ氏が調査を行っている。グイディ氏は日本美術に対する深い知識を備えているが、調査対象である江戸時代後期の役者絵や源氏絵などには、さまざまな比喻や、当時の社会状況においては制作者と鑑賞者に共有されていた情報基盤に基づいた表現がなされており、その解説作業は日本人研究者でも一筋縄ではいかない。本調査にポローニャの会を主催してきた山本陽史教授（専門：日本文学）が2015年より全面的に調査に協力することとなった。その山本教授から、日本美術史を専門とする筆者（佐藤）にも調査への参加が要請されたことが一因である。

もう一つのきっかけは博物館の地域貢献のためである。当館は山形師範学校の郷土室をルーツに持ち、大学博物館のなかでも長い歴史を有する館の一つである。創設以来、地域文化の伝承および普及啓蒙を使命としてかかげ、少ない事業費をやりくりして、特別展は1976年より、公開講座は1981年からほぼ毎年実施

してきた。また、2013年度からは外部資金の調達にも積極的に取り組み、文化庁の補助事業「地域と共働した美術館・博物館活動支援事業」の採択を受け、「山形の古文書を未来に伝承するプロジェクト」を行った。近年の社会構造の変化により、急速に失われていきつつある地域の歴史を物語る文書の価値を訴え、伝承方法を模索していくために、2年間にわたって古文書相談会やシンポジウム、特別展などを実施した。2015年度は附属博物館の新施設が完成したため、移転および新展示室の整備事業に追われることが事前に分かっていたため、文化庁への事業申請はしなかった。

翌2016年度の文化庁の補助事業「地域の核となる美術館・博物館整備事業」への申請にあたっては新施設を獲得した山形大学附属博物館が地域に貢献すべきことは何かを模索した結果、「山形の文化遺産を世界に発信するプロジェクト」に取り組むこととした。文化庁の補助事業対象として一番に掲げられていたのが「地域文化の振興と国際発信」であったことと、山形の文化施設にとって外国人観光客の誘致の対応が喫緊の課題であると判断したためである。

そして、このプロジェクトの一つとしてイタリア・ボローニャとの交流活動に博物館が参加することとなった。

## 2. ボローニャ大学博物館との交流

市民団体がこれまでに実施した交流事業は大きく二つに分けることができる。一つはボローニャ大学の日本文化研究者や、例えば映画など、ありとあらゆる国で行われている文化活動を対象とするなか、日本とも関わりのある分野の研究者との交流である。彼らを山形に招き、イタリアからみた日本文化の魅力に関する講演会や、イタリアの伝統文化を伝えるワークショップなどを実施してきた。もう一つは上述のとおり、市民団体がボローニャを訪れて行った、日本文化を紹介する事業などである。

本項で紹介する筆者のボローニャ大学における講演会は、後者のボローニャにおいて日本文化を紹介する活動にあたるものである。

まず、実施概要は以下のとおりである。

講演名：「着物の文様に見る日本人の願い」

開催日：2017年9月21日(木)16:00～18:00

会場：ボローニャ大学博物館

参加人数：70人

本講演の目的は我々が協力した東洋美術研究所の浮世絵調査の成果をボローニャの市民に還元することである。東洋美術研究所は収蔵庫を備えていないため、コレクションはボローニャ大学博物館に保管を依頼している。そして、ボローニャ大学博物館にはこのコレクション専用の展示室が備えられており、点数は限られるが、開館期間中は常時コレクションを見学できるようになっている。加えて、日ごろから東洋美術研究所の理事長ジョヴァンニ・ペテルノッリ氏や先述のアレッサンドロ・グイディ氏が講演会を実施し、日本および東洋美術の普及に努めている。日本文化を熟知したイタリア人研究者の解説は、イタリアの人々の日本文化への関心を高めるためには最適であることはいままでもない。ただ、イタリア人とは異なった、日本人ならではの切り口というものもあるのではないかと、そこをとりあげて日本美術の魅力を紹介できれば、より一層日本文化への興味が深めることができるのではないかと考えたからである。

講演会の日には一年前に決定し、開催日の3カ月ほど前に展示作品のリストをお送りいただき、改めて日本において作品の調査を行った。講演のテーマは「着物の文様に見る日本人の願い」とした。現代の日本人にすら失われつつあることだが、日本の着物の柄や文様には植物や動物などのほか風景や雪などの気象など実にさまざまなものが素材として使用されている。しかも、これらのモチーフにはさまざまな吉祥への願いが込められている。また、西洋においては衣服の紋様に動植物や波などの自然現象を用いること自体それほど多くはないし、それらに幸福への願いを込めるなどはほとんど行われていないため、東西の文化の違いが

際立つと考えたからである。

講演にはボローニャ大学博物館やこれまで交流を重ねてきたボローニャ大学の教員の方々が広報して下さったおかげで 70 名の聴衆が集まった。大変熱心に講演を聞いていただき、終了後には着物の値段に関するものや、今回言及しなかった着物の文様に関する質問なども投げかけられた。

講演会場は東洋美術研究所のコレクション展示室の隣室であり、終了後に聴衆は隣の展示室に移動して思い思いに展示を話しながら見ていた。おそらく、それ



講演会「着物の文様に見る日本人の願い」

までは注目することのなかった浮世絵に描かれた着物の細部に目を向けて、それが何かなどを話していたのだらうと思われる。日本美術に対するさらなる理解を深めるという点はある程度成功したのだと思われた。

そして、この事業を通して見えてきたことは博物館資料の活用とは、必ずしも館蔵資料に限らないということである。博物館において収蔵資料に関する情報は目録や図録、現代においてはデータベースやデジタルアーカイブなどで、社会に対して公開し、さまざまな人々の利用に供することは博物館活動の基本である。資料は活用する人によってさまざまな面が引き出される。そのためにより多くの人々がアクセスできるようにしなければならない。所蔵機関にこだわらず、さまざまな人が活用できるようにすることが基本であることを改めて認識した。

今後もボローニャ東洋美術研究所およびボローニャ大学博物館における日本美術の普及活動を継続し、ボローニャにおける日本美術コレクションの価値を高めていく予定である。

## 《調査研究活動》

### 国際シンポジウム

佐藤 琴（附属博物館学芸研究員）

#### 1. 概要

事業名：国際シンポジウム「大学と美術の可能性を求めて」

開催日時：2017年10月14日（土）13:30～17:00

場所：人文社会科学部 103 教室

#### 【プログラム】

基調報告：「大学におけるアート・リソースの活用に関する研究」

五十殿利治（筑波大学芸術系 特命教授）

代読 後小路雅弘（九州大学人文科学研究院 教授）

事例報告：「ボローニャ大学博物館の取り組み」

ロベルト・バルツァーニ氏

（ボローニャ大学（イタリア）正規教授・ボローニャ大学博物館システム 総責任者）

代読 山本陽史（山形大学学術研究院教授）